

ハン デンシ (東北大学大学院)

「儒家神道における修養論の考察——跡部良顕を中心として」

本格的な朱子学者と自認した崎門学派は近世社会で多様な研究活動を展開して、朱子学に基づいて近世社会の問題を突き詰める。山崎闇斎は晩年に神道の研究を懐いて、朱子学と神道とつながることによって新儒学の日本化の嚆矢と言われている。

跡部良顕(1658~1729)は江戸の二千五百石の旗本家に生まれた。伴部安崇をはじめ、佐藤直方、浅見綱斎、正親町公通など崎門朱子学と垂加神道の代表的な学者にしたがって儒学と神道を学んでいた。良顕は儒学を学びながら、神道を信仰し、儒学と神道の知識を兼ねて修養論を闡明している。「修己」と「治人」を中心テーマとしての朱子学は常に個人的な修養を重視している。良顕は朱子学の修養論にとどまらず、儒家神道という新たな領域の中で修養論を展開しようと努めている。良顕は朱子学の教説にしたがって、人間が陰陽五行の気によって形になると考えていたが、聖人が気を養うために楽を作ると考え、楽を重要視している。しかしながら、「西土」の楽は必ずしも日本の現実と似合うわけではない。良顕は、漢代、唐代、朝鮮の音楽は日本に伝えるといえども、日本社会と適合しないと考えて、すでに伝統的な儒教の礼楽論と現実の軋轢を意識している。また、良顕は神道、修養の中で「神」の存在を常に意識している。

本発表では、崎門学派の一人である跡部良顕の研究、特に、修養論の研究を通じて、近世社会の中で儒家神道と朱子学の関係理解を明らかにしたい。また、良顕の神儒一致論と実践論の角度から彼の思想構成を分析し、儒家神道の一側面を解明することを試みたい。